

永遠に通じるものこそ —原節子 女優の覚悟—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

映画界で国際的な権威を誇る英国映画協会が2012年に発表した「映画監督が選ぶベスト映画」で小津安二郎監督の『東京物語』が歴代1位に選ばれた。2位はスタンリー・キューブリック監督の『2001年 宇宙の旅』で欧米の名匠クラスの映画監督は圧倒的に小津を支持したという。

ヒロインを演じた原節子（1920-2015）は小津にとって唯一無二の特別な存在だった。原がいなければ小津調と呼ばれた映像美が完成しないことを熟知していた。弱冠15歳で映画界にデビューした絶世の美少女は次々と日本映画界の巨匠たちに起用され、若くして一世を風靡する。それでも歩みを止めることなく年を重ねるたびに銀幕の大スターとしての輝きをまましていった。

そんなとき予期せぬことが起こって人々を驚かせた。絶頂期を迎えた原は引退表明もしないまま幻のように忽然と姿を消す。

16歳で日独合作映画に抜擢

原は現在の神奈川県横浜市で2男5女の大家族の末っ子として生まれた。本名は会田昌江。老舗の生糸問屋を営む裕福な家庭で育った。保土ヶ谷尋常高等小学校（横浜市立峯小学校）から私立の横浜高等女学校（横浜学園高校）に進み、将来は小学校の先生になるつもりだった。

しかし1929年のニューヨーク株価暴落による世界恐慌のあおりで家業が傾き、原の運命も一変

する。家計を支えるために次女の夫である映画監督の熊谷久虎のす

すめで女優への道を歩むことになった。

女学校を2年で中退した原は1935年、日活に入社する。会社はデビュー作『ためらふ勿れ若人よ』（田口哲監督）の役名である節子を芸名にした。

翌年、時代劇『河内山宗俊』（山中貞雄監督）の京都の撮影現場をドイツの大物映画監督であるアーノルド・ファンクが訪れた。ヒトラー政権の意向を受けてファンクは日独合作によるナチス・ドイツのプロパガンダ映画を企画していた。主演女優の選考で日本側は田中絹代を推したものの、ファンクは同意しなかった。小柄で庶民的な田中の日本の魅力は西欧諸国に伝わりにくいと考えていた。撮影を見学していたファンクは長身で若々しくエキゾチックな美貌の原にたちまち魅了され、まだ無名の16歳の新人女優を史上初の日独合作映画『新しき土』のヒロインに抜擢する。

伊丹万作との共同監督で完成した大作は1937年に公開され、原は国際的女優として一躍脚光を



原 節子

浴びる。同年、義兄の熊谷らと海路で中国の大連に渡り、シベリア鉄道を使ってドイツのベルリンへ向かった。原一行はゲッベルス宣伝相から国賓級の接待を受け、ドイツ各地で熱烈に歓迎された。続いてフランスとアメリカを訪れ、パリで高名な映画監督ジャン・ルノワールと会い、ハリウッドで大女優のマレーネ・ディートリッヒと会食した。

もういちど小津先生と

帰国後は東宝に移籍し、スター女優として活躍する。だがインタビューなどで欧米に比べ日本の映画界は封建的と発言するなど物議を醸し、世間から生意気な大根役者と叩かれた。太平洋戦争が勃発すると『ハワイ・マレー沖海戦』（山本嘉次郎監督）などの戦意高揚映画に数多く出演する。

戦後は軍国主義に加担した責任を痛感し、従来のイメージを刷新したいと願った。1946年、資生堂が原を起用して作成した戦後初の多色刷り宣伝ポスターが話題になる。黒澤明の戦後初の監督作品『わが青春に悔いなし』では信念をもって反戦活動に打ち込む大学教授の娘を演じて反響を呼ぶ。翌年、フリーの女優として独立し、初の松竹作品『安城家の舞踏会』（吉村公三郎監督）に出演。1949年、英語教師を演じた『青い山脈』（今井正監督）が服部良一作曲の主題歌と共に大ヒットし、戦後民主主義のシンボリック的存在となる。

絶大な人気を獲得した原は小津の紀子3部作といわれる『晩春』、『麦秋』、『東京物語』で全盛期を迎えた。小津は「原節子を大根だと評するのはむしろ監督が大根に気づかぬ自分の不明を露呈するようなものだ。実際、お世辞抜きにして日本の映画女優としては最高だ」と原を絶賛した。共演者の笠智衆も「原さんはきれいなだけじゃなく、演技も上手でした。ほとんどNGも出しません。めったなことでは俳優を誉めなかった小津先生が『あの子はうまいね』とおっしゃっていたのですから相当なもんです」と回想している。

1950年代は成瀬巳喜男監督の代表作となった『めし』、『山の音』、『驟雨』などに出演し、高く評価された。原は文字どおり日本を代表する女優として新たな黄金時代を迎えてようとしていた。ところが1962年に封切られた東宝創立30周年記

念作品『忠臣蔵 花の巻・雪の巻』（稲垣浩監督）で大石内蔵助の妻りくを演じたのを最後に映画界を去る。同年冬、小津が生涯独身のまま60歳の誕生日に癌で他界した。沈黙を破って通夜に駆けつけた原は新聞記者の取材に「せめてもう一度、小津先生とご一緒に精一杯の仕事ができたらと、それだけがほんとうに心残りです」と話している。

好きなことは泣くこと

突然の引退はさまざまな憶測を呼び、やがて愛する小津の死に殉じたという伝説が流布される。ただ原自身は必ずしも小市民の家族ドラマに満足していなかった。むしろ黒澤明のダイナミックな作風に惹かれ、イングリッド・バーグマンのように情熱的な意志を放つヒロインに憧れていた。

とはいえ原は決して小津作品を軽視していたわけではない。小津調といわれるロー・アングルの撮影手法、絵画的な場面構成、反復するセリフの意図などを誰よりも深く理解し、畏敬する小津の並々ならぬ期待に全身全霊で応えようとした。

親しい友人に「引退するときは誰にも気づかれぬように消えていきたい」と語っていた原の隠遁生活は徹底していた。東京・狛江の自宅から鎌倉の親戚宅に移り住み、人目を避けて旅行はもとより外食さえしなかった。公の場で目撃されたのは1968年、小津の共同脚本家である野田高梧の通夜、そして1993年の笠智衆の通夜の2回だけだった。

素顔の原はおっとりして気取らない人と笠智衆が評している。撮影の合間にスタッフらと口を大きく開けて笑っていた。好きなことを聴かれて「読書。次が泣くこと、次がビール、それから怠けること」と答えている。

引退を覚悟した原は引退後の生活を秘匿することによって不世出の大女優である原節子を守り抜いたといっているだろう。同居していた甥夫婦によると原は日々読書に明け暮れ、ときどき親友の女優・司葉子と電話で話していた。晩年は葬儀も墓所も公表しないように言い遺し、小津と同様に生涯独身のまま95歳の長寿をまっとうする。

小津が「永遠に通じるものこそ常に新しい」と語ったようにスクリーンの原節子はいつまでも若く気高く美しい。